第83回日本内科学会講演会（1986年）

会 頭 演 説

内科学のあり方*

東京医科歯科大学医学部第二内科

武内重五郎

I. 序

科学技術の進歩に伴い、診断装置および治療機器は飛躍的な発展を遂げた。その結果、医学においては専門化・細分化の傾向が強力に進み、新しい時代に即した内科学の方向が問われている。一方、疾病の正しい把握と病める人を完璧に治すことを目的とする内科医にとって、内科学の一専門分野のみに精通し、他の領域をまったく知らないならば、内科医の使命を完全に果すことはできない。そこで、多年、内科学の研究・教育・診療に従事してきた経験をもとに、“内科学のあり方”について若干の見解を述べてみたい。

本論に入る前に、まず内科学とはいかなるものであろうか、すなわち、医学と内科学の概念および内科学の本質について、簡単に触れることにする。

1. 医学と内科学の概念

Medicineは、医学、内科学、薬物、診療などを意味し、医は、「病の状態をなくすこと」、「病める人を治すこと」と定義される。自然科学が発達する以前の昔においては、内科学は医学と同義語に用いられていたが、今日では医学の一専門分科を意味するようになった。

時代の進展に従い、医は医学(medical science)と医療(medical care)の2方向に進み、主として科学技術の発達と社会の要求により、分担して

社会と人類に奉仕するようになった。医学は医の技術を支持し、応用科学として医療の進歩に寄与し、医療は病む人の診断と治療、疾病の予防、健康の保持と増進などを担当しているのである。

2. 内科学の本質

内科学の本質について、上田英雄先生は、「内科学は、疾病の本態と病因を解明し、疾病を診断して適切な治療を行い、速やかに疾病を治すことを目的とする基本臨床医学である。内科学は医の本道であり、広い視野に立つ医学であり、臨床科学である」と述べている。すなわち、内科学は、臨床医学全般にわたる広い知識を包含し、(1) 病因の追求、(2) 正しい診断、(3) 適正な治療、を行う臨床医学である、と定義することができる。今日、内科学は専門・細分化が進み、対象となるべき患者を臓器別にばらばらに分解して、各専門家が自分の専門臓器のみを診る傾向にある。これは、専門的な知識を生かした高度の診療という利点はあるが、患者全体を診るという点に欠けることが多い。内科学は、あくまで臨床医学の一専門分科に留まらず、全体を統合する基幹臨床医学でなければならない。

II. 内科診断学のあり方

1. 内科診断学の歩み

医学の進展に伴い、内科診断学の内容や指導方法にも変遷が認められる。拙著、内科診断学（南

*本講演は1986年4月3日、東京都千代田区紀尾井町4-1 ホテルニューオータニにて行なわれた。

Presidential Lecture: The Importance of Physical Diagnosis in Internal Medicine

Jugoro TAKEUCHI, President of the Japanese Society of Internal Medicine (1985) and Professor of Internal Medicine, the Second Dept of Internal Medicine, School of Medicine, Tokyo Medical and Dental University

江堂、初版1966年)をみても、内科学の進歩に従い、数回の改訂を行ってきた。1972年の改訂では、“Physical diagnosis”の書としての特徴を強く打ち出し、1979年の改訂では、診断への道程とPOS(problem oriented system)による診療記録を新たに設けた。さらに1984年の改訂では、全身的症状やシステムレビューを詳細に記述し、全身を統観する“Physical diagnosis”の重要性を重ねて強調した。

2. 内科診断学の目的

内科診断学の基本は、(1)正しい病歴のとり方および現症の観察と記載法を習熟する、(2)臨床検査データの読み方と解釈の仕方を修得することである。この2点を徹底的に訓練し、基本をマスターさせた後、患者から得られた直接情報である病歴と現症を整理させ、臨床検査の所見から得られた情報を分析し、両者を総合することにより、考えられる疾患をいくつか抽出する。ついで、鑑別診断を行い、正しい診断に到達する。すなわち、内科診断学の究極の目的は、“診断にいたる思考過程”を学ばせることである。

3. 内科診断学教育のあり方

内科診断学の教育の第一は、病歴のとり方と現症の観察および記載法を徹底的に訓練することであり、第二は臨床検査の選択と検査データの読み方および診断への応用を習熟させることであり、第三はこれらの情報を総合し、診断への道程としての鑑別診断をマスターさせることである。すなわち、以上の3点を修得させることは、いうまでもなく、physical diagnosisの研修にはかならない。しかしながら、実際に即した内科臨床の実力を内科診断学の教育のみで涵養することは不可能である。その実際的な教育は、内科診断学の講義・実習のほかに、系統講義、臨床講義、外来実習、CC(clinical conference)、病棟実習BST(bed-side teaching)などで繰返し行うべきである。

III. 内科学における診断のあり方

1. 診断への道程

内科における臨床診断は、通常、(1)病歴の聴取、(2)現症の観察、(3)臨床検査の実施、(4)鑑

別診断、の過程を経て行われる。すなわち、まず患者の病歴を正確にききとり、患者の病状を詳細に診察し、必要と考えられる臨床検査を実施する。ついで、これらの情報から得られた結果を総合的に判断し、考えられるいくつかの疾患のなかから、もつとも妥当と思われる疾患を選び出す操作、いわゆる“鑑別診断”の過程をとって行われる。

2. 鑑別診断の必要性

鑑別診断とは、主治医が診ている患者にとつてもつとも妥当と考えられる疾患と、病歴・現症・検査所見から想定される疾患を対比し、類似性を求めるだけでなく、相違点あるいは矛盾している点についてもあらゆる角度から詳細に検討し、正しい診断へ到達する糸口を見つけることである。すなわち、鑑別診断は、正しい診断へ到達する重要な思考過程である。

3. 診断への情報の補充

比較的容易に鑑別診断が可能のこともあるが、直ちに診断が決まらないことも少なくない。このような場合は、(1)経過観察により既存の臨床症状の推移、新しい症状発現の有無などの病態の変化に注目し、(2)新たな臨床検査の追加を行い、(3)病状によつては、診断未定のまま治療を開始して、その効果を判断する、などの新しい情報を補充し、正しい診断へ到達するように努めるべきである。

4. 臨床検査の役割

臨床検査には、生物学的な方法(細菌学・血清学・免疫学・細胞組織学的方法など)、化学的方法(血液生化学・内分泌学的検査など)、生理学的方法(心電図、筋電図、呼吸機能、心カテーテル法、基礎代謝など)、形態学的方法・画像診断法(X線検査、CT、シネアングリオ、NMR、DSAなど)などがある。

近年、診断機器や検査手技の画期的な進歩により、診断精度は著しく向上し、従来診断が困難であつた疾患でも、生前に正しい診断をつけることが可能となつた。臨床検査データは、単に診断の決定に寄与するばかりでなく、病因の確定や病変の性状と広がりをも明らかにし、病態生理学的認識

が深められ、さらに病態の推移を正しく把握し、それに応じて適切な治療法を決定し、治療効果の判定を行うことにも役立つのである。

5. Physical diagnosisの重要性

前述のごとく、臨床検査は、診断の確定や治療法の決定に対してきわめて有用であるが、検査法の進歩と有用性をあまりにも重視し、病歴の正確な聴取や現症の詳細な観察を軽視するならば、それは大きな誤りである。患者の病歴や現症から得られる直接情報の活用、すなわち、physical diagnosisを重視することは、診断や治療法の決定に役立つばかりでなく、患者の身体的・精神的・経済的な無用の負担を避けることにも役立つのである。

IV. 内科学における治療のあり方

1. 治療の理念

いうまでもなく、治療の目的は、患者の健康の回復とその保持であり、同時に患者を幸福に導くことである。一方、治療の本質は、本来、生体に備わっている自然治癒の機転をそこなわず、助長するような治療でなければならない。また、治療の理念は、単なる症状や病気の治療のみに専念することではなく、Hippocrates医箴にも示されているように、愁訴に悩む病める人を完全に治すことである。

2. 診断未定での治療の意義

日常の臨床において、正しい診断を速やかに行うことは、きわめて重要である。しかしながら、

診断の正確さを重視するあまり、診断が確定するまで、治療をまったく実施しないという態度は、必ずしも正しいとはいえない。すなわち、最終診断にいたるまで一時的な治療を行い、患者の苦痛を和らげることもきわめて大切である。一時的な治療によつて臨床診断が確定する場合も少なくないからである。

3. 適正な治療

病人は、なんらかの身体的、あるいは精神的な異常や苦痛のために医師を訪れる。その目的は、いうまでもなく、その異常や苦痛をとり除いてもらうためである。その異常や苦痛をとり除く行為は、“治療”と呼ばれるが、申すまでもなく、適正な治療は、“正確な診断”を基礎とするものでなければならない。

V. 結 語

診療の機器と技術が長足の進歩を遂げ、専門細分化が進んだ医学の現状においても、内科学は、医学の一専門分科に留まることなく、広い視野に立つて全体を統観する基幹臨床医学でなければならない。また、内科学の目的は、正しい診断のもとに適正な治療を行い、病める人を速やかに治すことである。適正な治療は正しい診断を基礎とし、正しい診断は“physical diagnosis”を基礎とする。この意味で、physical diagnosisは内科学の根底をなすものであり、ここに“内科学のあり方”を求めるのである。